

幼児教育への理解を深める保育者研修のあり方
—愛知県(旧)清洲町立保育園における2年継続保育士研修にかかわって—

本山 ひふみ

Training to deepen understanding to preschool education
for the childcare person

~The childcare person training In Aichi Kiyosu nursery school for two years~

Hifumi Motoyama

In nursery school, childcare persons have deep understanding, knowledge and technique about childcare of less than 3 years old child. But they don't have many chances to discuss in their nursery school about more than 3 years old beside kindergarten teachers. So, in Aichi Kiyosu, they gathered from 5 nursery schools to discuss their childcare.

Their themes were "cooperation with parents" and "a review of childcare". They published a report about their childcare, and discussed each other. My roles were to support and to suggest for them.

We were sure that it was important for childcare persons to tell the growth of child for his parents, and to review of child understanding, and to think about the environment constitution that children could show enough power.

はじめに

保育所保育の保育内容については、およそ10年ごとに監督官庁から発表される「保育所保育指針」において、年齢ごとに示されている。児童福祉法に基づく大筋は根底にあるものの、改定のたびに時代の要請に見合った事柄が加除されることになる。

現行の「保育所保育指針」は、平成12年4月に施行されたものであるが、その最終章の中には、職員の研修等について「保育所では、所長はじめ職員全員が研修の意義及び必要性について共通理解を持ち、職員が研修に積極的かつ主体的に参画できるような環境づくりに心がけ、職員の資質の向上を図る」といった記述がなされている。このような記述を受けて、各地で保育士研修の重要性が認識され、取り組みが進められている。

本稿では、私がかかわった愛知県(旧)清洲町立保育園5か園合同の2年継続の保育士研修を通して、幼児教育への理解を深める保育者研修のあり方について考察する。

1. 自主研修会開催の経緯

愛知県（旧）西春日井郡清洲町では、平成 14 年度に県下公立保育園の研究発表の順番が回ってくるようになったことをきっかけに、町内各園から選ばれた研究委員を中心に、平成 12 年度から本格的な研修を始めた。2 年後の発表が無事に済んだ後には「これからも研修を続けていきたい」という気持ちが残ったという。これは素晴らしいことである。研究発表のための研修に辛い思いだけが残り、もう研究も研修も懲り懲りだと思ってしまうのでは意味がない。研修を通じて自分が保育者として向上していくことを実感できたからこそ、続けていきたいという意欲につながったのだろう。

そこで、研修の方向性を模索した清洲町では、町内の別の園に勤務している同年輩の仲間と忌憚のない意見を交わすことが大切だ、と考えられ、5 つの町立保育園の保育士を、経験年数ごとに 4 つのグループに分け、平成 15 年度から自主研修をスタートさせた。そして、しばらく進めてみたが、そのうち 2 つのグループでは、助言者が必要ということになり、私が依頼を受けた。私が参加するのは、毎月 1 回開かれる自主研修のうちの隔回である。

第 1 グループは、経験 20 年以上の主任級の 7 人で構成され、「家庭との連携」をテーマとしている。第 2 グループは経験 12～16 年の保育士で、育児休業による入れ替えを含めて 10 人で構成され、「保育の見直し」をテーマとしている。

2. 保育所保育と幼稚園教育の接点、幼稚園教育現場出身の私に助言できること

第 1・第 2 グループのメンバーは、私と同程度かそれ以上の経験を有する保育士であり、その方々に対して私が一体何を助言できるのかと考えた。私は名古屋市立の幼稚園に 15 年間勤め、その間に保母資格（現在の保育士資格）も取得はしたが、保育所保育の現場経験は皆無である。7 年前に保育者養成校で勤めるようになってからは、あちこちの保育所にも実習訪問させていただくようになったものの、そこでの保育者や乳幼児との出会いは一期一会で、その場面に限定した理解にすぎない。保育者や乳幼児を継続的に理解する意味では、私の 3 人の子どもたちがお世話になった 3 つの保育所での見聞が有用であった。

保育所では、乳児に対する理解や知識や技術の積み重ねは大変厚く、幼稚園教員には全く経験することのない様々なノウハウが蓄積されていて、日々感心の連続であった。ところが、幼児後期になると、幼稚園での自分の実践や同僚たちが展開する保育と比べて、表現しにくい物足りなさを感じるようになった。自分の子どもの同級児に対して「この子はもっと力があるはず」「環境構成をこう変えたらこんな可能性も生まれてくる」といった思いが湧いてきた。

以前、別の市の保育士研修会にうかがったとき、その責任者の方から「保育士はもっと幼児教育を勉強しなければ、3 歳以上児に対して幼稚園と同程度の教育は行えない」といった言葉を聞いた。保育士資格と幼稚園教諭免許の両方を持っている保育者は多いが、どちらかで働き始めると、当然、その職業的な専門性は高まり、もう一方は足踏み状態になる。制度的な違い以外に両者の職業的な違いはどこにあるのだろうか。以下にあげてみる。

保育所は、ひとりの保育士の勤務時間より長く開設している場合が多いので、時差勤務を行っている。保育時間中に保育士の休憩時間も存在するし、早朝・夕刻対応は担任とは別の保育者が担当することが多く、ひとりの子どもは一日に複数の保育者に見てもらうことになる。幼稚園では、送迎バスがある場合を除いては、担任の元で過ごすのが常である。子どもの担任への依存度は、保育所児と幼稚園児とは当然違ってくる。

保育所が0歳児から就学前児までを入所可としている場合には、子どもの年齢ごとの保育者配置は3歳未満児に多く、3歳以上児には少なくなるため、全保育者に占める3歳児以上の担当者の割合が少ない。その上、3歳児以上は各学年1学級規模の園が多く、同学年間で保育者が話し合う機会が持てない。幼児後期の保育について研鑽を積みにくいことは否めない。

保育所の生活は、生活リズムを重視した日課によって大枠が決まっているのが一般的である。給食についてもきまりがあるため、時間の制約が幼稚園に比べてはっきりしている。また、登降園時刻が家庭の事情によって幅があるのも保育所の特性でもある。保育中の時間配分が担任の裁量に委ねられることの多い幼稚園との違いだといえよう。

近年の幼保一元化・一体化の事例報告を見ると、その中で働いている保育者ですら、一緒に活動を開始して初めて、この2つの似て非なる保育機関の相互理解の不十分さにあらためて思い至るようである²⁾。互いの長所を生かしあって、子どもたちの幸福を願った保育を展開できるよう、私自身に可能なことは、幼児教育への理解を深める研修を行っていくことだと考えた。

3. 事例検討を通して明らかになった問題点

自主研修会は、メンバーが順に保育事例を出し、話し合っていく方法で進められた（保育カンファレンス）。2グループに共通した問題点は以下のとおりであった。

(1) 事例の提供に当たって

- ・ 問題提起よりも事例としてのまとめやすさを優先する傾向がある
- ・ 提供した事例が保育者の保育観を表現する、という意識が薄い
- ・ 保育中の違和感や焦りの中にある自身の問題意識が明確でない

(2) 話し合いに当たって

- ・ 話し合い初期には、事例提供者に対する「結構なお点前でした」といった雰囲気になっていた
- ・ 事例提供者への疑問が出されても、説明を聞くとそれを受容するだけで、突っ込んだ話し合いになりにくかった
- ・ 「みんな仲良く」「決まりを守って」といった保育者側の願いがストレートすぎて子どもの気持ちに沿わなかった
- ・ 話し合いによって気づいたことが反省点にとどまり、ではこれからどうしていくとよいかが見出しにくかった

4. 助言のポイント

こういった状況を受けて、私は次の点を助言のポイントとした。

- ・ 子どもの言動の解釈を変えてみることで、子どもの側に立って考える視点を提案する
- ・ 保育者による受け止めとかかわりの違いで、子どもがどう変わってくるのか私自身の経験から具体的に話して、理解を促す
- ・ 人とかかわる力は人とかかわることでは養い得ないことを再認識し、子ども同士のもめごとこそが個を育てる好機だと捉え直す
- ・ 集団の中で変容する子どもの姿を保護者に発信する大切さを知る
- ・ 個の力を十分に伸ばす環境構成の工夫について再検討する

5. 保育カンファレンスの経過と事例

参加保育士が持ち寄った事例について、まず保育者だけで意見を出し合い、次に私が事例ごとに感じたことを述べ、さらに事例提供者がまとめる、という方法で保育カンファレンスを進めた。

以下に示すのは、グループごとの1年目、2年目の取り組みの様子である。

(1) 第1グループ「家庭との連携」1年目の様子

① 研究の目的（研究物³⁾より抜粋）

親の気持ちを受け止め、保育園としてどう援助し、何を伝えていいたらよいのか、より良い子育て支援ができるよう取り組んでいきたい。

② 提示された事例の一端（概要）

「友達の家で遊びたい」5歳児 7月

A児には仲良しの友達ができ、園で一緒に遊んだり生き生きした表情で会話したりする姿が見られる。しかし、降園後に家で遊ぼうという話題になると心配そうな顔になるA児。母親の許可を得にくらしく、相手の子どもと祖母がわざわざ待っていて交渉してくれても、A児の母親にあっけなく断られる。母親は他の保護者との接触を持とうとしないため、親同士のつながりが全くない現状である。保育者は、母親に相互の子どもの気持ちを受け止めてほしいと感じ、母親の都合や言い分を聞きながら、子どもの降園後も遊びたい気持ちを伝えていこうとしている。

③ ②の事例に対するカンファレンスの中で（概要）

A児は親に対して自分の気持ちを言い表せず、その反動からか園生活では友達に対する意地悪や言葉の暴力もみられる。降園後、友達と一緒に遊びたい気持ちが強いが、母親の気持ちを優先して我慢していると解釈できる。一方母親は、家ではいい子なので園でのトラブルに耳を貸さず、降園後は「私は子どもと一緒にいたい」という自分の気持ちを優先させている。かたくなになっている母親の心を少しでも開くようにするには、母親を丸ごと受け止めることが大切であろう。日常の会話の中で、子どもの良い面を伝えながらコミ

コミュニケーションを図ることが必要だ。そのためにも保育者は、子どもの成長の姿を確認していかなければならない。

④ 研究のまとめ（研究物³⁾より抜粋）

保育士は、よりよく育ててほしいという願いから、知らず知らずのうちに、保護者の至らないところを指摘したり、指導したり、一段高いところから納得させようとしていることに、カンファレンスをするにより気づいた。保育者は、相手の立場に立って共に解決策を見つけていこうとする姿勢を持つと共に、子どもが遊びを通して変わってきている姿や育ちを確実に保護者に発信していくことが重要であることに気づいた。

(2) 第2グループ「保育の見直し」1年目の様子

① 研究の目的（研究物⁴⁾より抜粋）

子どもたちに寄り添った援助、配慮ができていないか、それぞれの疑問点や困っている点について意見交換をすることにより、自分の保育を見直す。

② 提示された事例の一端（概要）

「僕の場所、取った」3歳 10月

B児は、他児が使っている玩具を欲しがったり、自分の欲しい玩具が手に入らなかったりすると「ア～ア～」と駄々をこねたり、泣いたりして思いを通そうとする。保育者は、時には我慢するという経験も味わって欲しいと思っている。その日も、2人使いのロッカーの前で、「ア～ア～」と言って押し合いになっており、尋ねると「僕の場所、取った」と言うので、取ったのではなく、そこは2人で使う場所なので譲り合うよう指導した。

「ブロックのお約束」5歳児 11月

C児とD児は4歳児の時から玩具の取り合いや遊び方の違いからぶつかることが多く、5歳児になってからも叩く、つねる、蹴るなどが頻繁に起きる。保育者は友達の違いに気づいたり、受け入れようとしたり、自分の思いを言葉で伝えられるように願っている。その日は、一片のブロックをめぐる、「僕が最初に見つけた」「ちがう、僕のだ」と引張り合っていた。保育者はブロックを預かり、使っていない時にカーペットに置いたままになっているブロックが、誰のものかわからなくなるので箱に入れるように双方に確認した上で、置いたままの物があつたら許可を得てから使うように言って聞かせた。

③ ②に対するカンファレンスの中で（概要）

3歳児にとっては自分のロッカーはあくまで自分の場所であり、共用する相手の気持ちまで思い及ばないのは当然である。B児が発した声に対し「また、わがまま言っている」と捉えないで、「何かあつたのかな。自分の言葉で少しでも表現できるといいな」といった気持ちで接していけば、「僕の場所、取った」と言ったB児の言葉も否定しないで受け止めることができたであろう。保育のねらいの設定も子どもの実態に見合っているかどうか検討する必要がある。

5歳児ならば「自分の思いを言葉で伝えられるように」と保育者は思いがちだが、保育者の願いと2人の成長とに差があるようだ。手をだしてしまうという行動には何らかの理由があるはずである。同じような遊びを好むからこそ、そこでぶつかる訳で、それぞれが互いの思いを出せるような援助が必要である。そのためにも保育者と子どもとの一对一の関係作りが欠かせない。保育者が「お約束」と言う形で、子どもの気持ちとかけ離れた所で收拾させようとする、何のための約束かわからず、子ども自身の力にはならない。きまりについての考え方を、保育者自身が捉えなおす必要がある。

どちらの例も、まず子どもが保育者に対して自分の気持ちを伝え、受け止められたと確信でき、また、自分だけでなく相手にも等しく主張があることを実感できて初めて、相手との共存を考える段階に進めるであろう。

④ 研究のまとめ（研究物⁴⁾より抜粋）

カンファレンスをしていく中で、それぞれが意見を出し合い、相手の意見を否定するのではなく、自分との意見の違いに気づいたり、考え直したり、それぞれが学ぶことができ、カンファレンスそのものが深まっていった。（中略）保育士は、先へ先へ結論を出さないよう、子どもが考えられるような保育をしていくことが大切であり、それが、子どもたちの「人とかかわりの育ち」の基盤となっていくのではないかと考え、保育士同士が、子どもの姿を通して、話し合いを続けていき、子どもの内面を理解すること、よりよい援助の仕方を考えながら保育していくことを大切に、今後も保育していきたい。

(3) 第1グループ「家庭との連携」2年目の様子

① 研究の目的（研究物⁵⁾より抜粋）

子どもの内面や育ちを通して保護者にどうかかわっていったらよいか、そしてその事をどう伝えていったらよいかを考え、よりよい子育て支援ができるよう研究を進めていくことにした。

② 提示された事例の一端（概要）

「あのね、違っていたから、替えようと思ったの」4歳児 8月

夏祭りが終わって、担任外保育士が片づけていると、突然保育室にE児とF児が入ってきて保育士の姿に驚き、すぐに出ていった。その様子を不審に思い、尋ねると、祭りでもらったスーパーボールの大きさが違っていたから、取り替えようとしていたことがわかった。さらに、カバンをのぞくと、ポケモンシールがたくさんあり、これは年長児の水筒からはがしてきた物だとわかった。二人の母親にはこの件を伝え、園職員には担任の目の届かないときは補い合おうと話した。

さらに翌日、E児の母親が、G児のバッヂを持ち帰ってしまったと不安な表情で相談に来たので、保育士は「園でも見ていくわ。お母さんも何かあったら知らせてね。両方でEちゃんのこと見ていこうね」と言葉をかけると、母親はほっとしたような表情を見せた。

③ カンファレンスの中で（概要）

不安定な子どもの様子に対する母親の迷いや悩みに、保育士からの「一緒に育てていこう」という意味の言葉が、母親の気持ちを楽にさせ、保育士への信頼感を増したように感じた。また、保育士は、担任だけでは把握できないこともあるので、学級の枠を越えて、保育士同士が連携して子どもや保護者を支えるという姿勢の大切さを学んだ。

④ 研究のまとめ（研究物⁵⁾より抜粋）

事例を通してカンファレンスしていくうち、子どもの思いや発達を見ることの大切さ、そして、その子どもの思いや発達に対しての援助の仕方、保護者への援助のあり方、クラス単位でなく園全体で見えていくことの大切さを学んだ。保育士も親と共に育てていく姿勢で、相互に話し合っていける関係を作っていきたいと思う。子どもとの信頼関係を築いていくことが、家庭とのより良いかかわりにつながっていくものと思う。

(4) 第2グループ「保育の見直し」 2年目の様子

① 研究の目的（研究物⁶⁾より抜粋）

実際の保育を振り返ってみると、まだまだ自分の思い込みで保育してしまったり、自分の都合で保育してしまっているところが感じられたので、昨年度に引き続き実践記録をとり、カンファレンスをし、自分の保育を見直していきたいと考えた。

② 提示された事例の一端（概要）

「いやだ、赤チーム、遅いもん」3歳児 10月

運動会で3歳児にリレーを取り入れた。運動会当日、いつも一緒に走る友達と並んで待っていた子どもが、相手チームの大幅なリードにより置き去りにされた形となった。自分がまだスタートできないために大泣きし、バトンが来ても座り込んで走ろうとせず、結局、保育士が抱きかかえて走った。

③ カンファレンスの中で（概要）

友達と並んで一緒にスタートし目的に向かって走ることはできるが、リレーは状況によって走る友達が異なることもあるといった理解が3歳児には難しい。3歳児の姿をふまえ、幼児の自然な興味、関心に応じた運動会という行事への参加方法を考え、保育していかなければならないと感じた。

④ 研究のまとめ（研究物⁶⁾より抜粋）

私たちは、子どもが自然に思いを出せるような保育士でありたいと考え、その為に私たち保育士は、「子どもの思いを受け止めているつもり」ではなく、子どもが「思いを受け止めてもらっているんだ」と感じられる援助の仕方を、日々、自問自答し、考えていくことが大切であると学んだ。

まとめ

保育所保育士は、保育所のもつ独自性から、3歳未満児の保育については深い理解や、多くの知識や技術の積み重ねを有している。しかし、3歳以上児については幼稚園に比して同じ園の保育者間での研究討議が行われにくい。その点を補おうと、愛知県清洲町において5園の中堅以上の保育士が集まって、2グループが自主研修を行った。

両グループは、参加保育士がそれぞれ事例を持ち寄って、事例研究をおこなったが、筆者は、そこでの共通する問題点を分析して助言したり、各事例に対する別の角度からのとらえ方を示唆したりした。

第1グループは「家庭との連携」をテーマに、気になる子どもの保護者に対応した事例を検証した。その中で、保育者が保護者に子どもの育ちを伝えていくことの大切さを確認していった。また、第2グループは「保育の見直し」をテーマに保育場面における保育者のあり方を検討した。そこでは、保育者の子ども理解、対応を見直し、さらに子どもの力を十分発揮できる環境構成の工夫を考えていった。

平成の大合併を受けて17年4月には同じく西春日井郡の新川町と西枇杷島町との3町が合併した。隣接する町とは言うものの、町立保育園はこれまで町ごとに運営されてきたので、今後一緒に運営していくとなると、さまざまな調整が必要となった。園行事ひとつとっても、これまで町内で足並みをそろえてきたものは、これからどうしていったらよいのか、話し合いに相当な時間を費やしていると聞いた。保育士研修を今後どうするかまでは簡単に決まりそうにない。

この2年間、事例を通しての話し合いは回を重ねるごとに深まり、保育士同士が互いに高めあう気風が生まれてきたと感じる。私の力などは、ほんの一助にすぎないのだが、自主的に研修しようとする姿勢は、合併後も大切に育てていってほしいと願う。

同時に、私自身、今の子どもたち、保護者の抱えている問題を共有できたことは、子どもや保護者への理解を深め、また保育所保育の抱える課題を考えていく機会となった。今後も実践者と研究者がともに保育実践を研究する活動⁷⁾に携わっていきたい。

引用・参考文献

- 1) 厚生省 平成11年改訂 保育所保育指針 フレーベル館 1999年
- 2) 保育行財政研究会 幼保一元化～現状と課題～ 自治体研究会 2004年
- 3) 清洲町立保育園自主研修第1グループ 家庭連携（平成15年度研究のまとめ）2004年
- 4) 清洲町立保育園自主研修第2グループ 保育の見直し（平成15年度研究のまとめ）2004年

- 5) 清洲町立保育園自主研修第 1 グループ 今求められる家庭連携（平成 16 年度研究のまとめ） 2005 年
- 6) 清洲町立保育園自主研修第 2 グループ 保育の見直し（平成 16 年度研究のまとめ） 2005 年
- 7) 小川博久他 保育者論 樹村房 2002 年